

岡谷市議会 社会委員会 行政視察報告書

【総体事項】

1. 視察日程：令和6年7月24日(水)～26日(金)

2. 調査事項（視察先）

(1)神奈川県藤沢市：「藤一teria」

保育園建替えに併せ、PFI法に基づく事業として、
民間施設と保育園周辺の公共施設を集約した複合施設

(2)神奈川県川崎市：日本理化学工業株式会社

チョーク、キットパス製造・販売
社員93名中知的障がい者67名雇用

(3)神奈川県横浜市：「横浜ラポール」

横浜市営 障がい者スポーツ文化センター

(4)山梨県北杜市：社会福祉法人 緑樹会「グリーンヒルホーム」

就労移行支援、就労継続支援B型作業所、グループホーム
運営、特につどい工房「杜の風」のマドレーヌ、シフォンケ
ーキは市内10カ所で販売、人気を博している。

3. 視察参加委員

委員 長	山崎 仁
副委員 長	秋山 良治
委 員	小松 壮
委 員	土橋 学
委 員	上田 澄子
委 員	田村 みどり

【視察地報告】

(1) 神奈川県藤沢市「藤-teria」

1. 施設・事業概要

藤沢市では、藤沢市藤が岡二丁目にあった老朽化した「藤が岡保育園」の建て替えにあたり、隣接した看護師寮の跡地など市の所有している土地に、PFI方式（公共施設の設計・建設・維持管理・運営を民間の資金や経営能力、技術力を活用して行う公共事業の手法）を活用した公共施設と民間施設の複合施設を整備した。

施設内には、保育園、放課後児童クラブ、地域子どもの家、防災備蓄倉庫他などの公共施設と総規模多機能型居宅介護施設、小児科クリニック、歯科クリニック、薬局、言葉の相談室、フィットネスクラブなどの事業者が ASMACI（アスマチ）藤沢として民間施設が併設されている。

藤沢市はこの事業にあたり、公募型プロポーザル方式で3社から提案を受け、地元の建設会社門倉組が代表企業となる、SPC（特別目的会社）ふじがおか活々交流株式会社と事業契約をしている。

この藤-teria（ふじてりあ）という愛称は、藤が岡の藤とウイステリア（ふじ色）が由来で、藤の花言葉「歓迎」のように、「多世代が気軽に集える施設になるように」という思いが込められている。

2. 評価、感想

保育園児と居宅介護利用者との交流が行われたりして地域の他世代交流拠点となっている。また、民間の医療機関があるため子どもの体調不良などの対応も迅速にできるなどのメリットも感じた。

20年間の契約終了後は、公共施設と民間施設の空間を完全に分けていることから、民間施設のみ取り壊す事も可能で選択枠の幅を持たせている。また、管理運営のためのランニングコストを効果的に削減できるメリットも魅力である。

近年、公共施設の複合化が急速に進み、新しい公共施設が生まれている。複数の機能や異なる目的を持つ施設を1ヵ所に集約させ、複合化・多機能化した施設をつくることで、住民の利便性が向上する。その結果、施設の賑わいが増し、施設間で多様な人々の交流が促進されるなど、相乗効果がもたらされる。また、複合化には限られた予算内で土地と建物を最大限に活用でき、管理・運営のためのランニングコストを効果的に削減できる。その中でも、PFI方式を用いたこの藤-teriaは、規模もあまり大きくはなく、児童福祉、高齢者福祉、

子育て環境の充実、防災備蓄拠点など行政的観点からみても、うまくいっている複合施設ではないかと考える。

PFI方式を活用した施設運営では、民間事業者が利益を追求することでの公共性が低下するリスクや、PEI事業の契約期間が長期にわたるための長期契約のリスク、運営は民間事業者が主体となるため、自治体が運営のコントロールしにくくなるなどの点があることも忘れていけない。

3. 岡谷市に反映すべき点

岡谷市にも多種ある公共施設の老朽化には多くの課題があり、市単独では改修工事や更新工事にも財政的に大きな負担がかかる。また、市民サービスの低下を下げずに公共施設の管理運営を考える上でも官民連携は必要になってくる。

例えば保育園も医療機関のある複合施設にあれば、預けている親は安心感もあり、介護施設があれば高齢者と子どもたちの接点も生まれ、複合施設の入居の組み合わせ次第では大きなメリットが生じることを感じ今後の市内の施設の在り方の参考にしたい。

(2) 神奈川県 横浜市：日本理化学工業株式会社

1. 会社・事業概要

昭和12年に東京大田区に黒板用チョークを作る会社として創業。現在は川崎市と北海道に工場があり、チョークの国内市場シェア70%以上のトップメーカーである。先代の頃から障がい者の雇用に力を入れており、全従業員の約7割が知的障がい者で今ある能力で仕事ができるようになり、さらにより能力を高めていけるよう作業方法の工夫・改善を行い環境づくりに努めている。

障がい者多数雇用を目指すきっかけは、「愛されること、褒められること、役に立つこと、必要とされること」を知ったことから、企業理念として「人間尊重」の精神を掲げています。要するに誰もが生きやすく、誰もが働きやすい皆働社会（かいどうしゃかい）の実現を目指している。

チョークの商品開発にも力を入れており、黒板使う学校、塾、予備校などのすべての学びの場で、誰もが見やすい、人の色覚の多様性を考慮し、ほぼすべて人が色の違いを見分けやすい「カラーユニバーサルデザイン」に基づいた配色のチョークや年間に大量に廃棄されるホタテの貝殻を粉末にし再生利用した製品もある。

近年では、チョーク需要減で心配される中、川崎市の応援もあって、産学連携の助成制度を活用した、粉も出ず窓ガラスに書けて濡れた布で消せる「キッ

トパス」の製品化に成功し、幼児の感性を目覚めさせる子育てに役立つ商品の市場ができてきている。

2、評価、感想

企業哲学がしっかりと根付いている会社であるという印象が一番強く残った。現会長大山泰弘氏は、チョーク工場では大きな会社にはなれないのだから、せめて一人でも多くの障がい者に働く場を提供できる会社を考えた。字が読めず数字の単位も理解が難しい社員に、作業工程を交通信号をヒントに、赤、青の色の区別で伝えるなどの工夫がいたるところにされており、工場内も整理が行き届いていることに感心した。

何よりも、障がいをお持ちの社員たちが黙々仕事をされている姿にチョーク職人だと思った。神奈川県最低賃金の1120円が守られており、月収は17～18万円あり障がい者年金を含めると、十分自立した生活ができ家族にも大きな安心を与えることがわかった。

社員を誉めて育てることが、障がいのあるなしに関わらず必要なことも再認識できた

3、岡谷市に反映すべき点

岡谷市に反映できる取り組みとして、市内の企業や公共施設における障がい者雇用だが、その際、作業内容の工夫や社員の役割を明確化するための支援体制の構築、市が主導して企業と連携し、障がい者が働くことで社会とのつながりを持つ機会を提供するプログラムを導入することにより、障がい者の自立と地域社会への貢献が促進できるためには、最低賃金を確保できるまでの仕事の質と量を障がい者に教えることの出来る企業の育成である。

障がい者を「ものづくり職人」として育成するには、相当な努力と協力が必要であり、岡谷市においても何を生産するのかを明確にし、障がい者が高い水準で働けるような環境を整えることが重要である。

ある程度、行政の支援においての充実がされ、障がい者の自立を支援する事業所の設立を進めることが、必要不可欠である。

(3) 神奈川県横浜市「横浜ラポール」

1、施設・事業概要

1992年(平成4年)に開設され築30年を超え、横浜市にある「障がい者スポーツ文化センター」という名称で、障がい者の社会参加および、福祉の増進並びに障がい者やその介護人、その他の市民相互の交流を図るために設置さ

れた文化とスポーツの複合施設である。

スポーツ施設として屋内温水プール、メインアリーナ(バスケットコートや、2階にウォーキングコース等)、サブアリーナ(ダンス場、ボッチャコート等)、サウンドテーブルテニス、ボウリング場(4レーン)芝生の屋外グラウンド、地下グラウンド、健康相談コーナーなど。文化施設としておもちゃ図書館、シアタールーム(300席)、大小会議室、料理や陶芸、手芸などの検索活動室など設備は整っている。

運営は公益財団法人「横浜市リハビリテーション事業団」が行っており、利用者数は、令和5年度は1日平均863人、年間29万8616人。開館日数は346日、1年を通して、いつでもスポーツができる環境である。

2、評価、感想

横浜ラポールの立地は新横浜の日産スタジアムに隣接しており、視察日は平日にも関わらず、多くの方々が利用されていた。大きな特徴は障がい者が、この施設に来れば文化活動およびスポーツを楽しみ、余暇の充実ができることが一番大きい。「来て良かった」「また来たい」と思っただけのように運営されており、令和6年の予算14億3,000万円程で施設の規模や予算も、充実したサービスの背景となっている。

障がい者が、有る無しに関わらず、共にスポーツができる環境があることに驚きさえ感じ、障がい者が自分の意志で参加できるように、多種のプログラムがスポーツ活動と文化活動とで構成されており、社会参加しやすいようになっている。

障がい者の自立を目指すための支援をしていくが、はじめは他者を頼っていた方が、自分の意思と選択で参加する中で、次第に自立出来るようになっていき、一般の方も一緒にやることで理解や交流を深めている。

身近に障がい者スポーツを楽しむ環境があることが、とても重要であり、障がい者が色々なことにチャレンジでき、余暇を楽しむ事のできる環境整備の必要性を強く感じた。

3、岡谷市に反映すべき点

横浜ラポールのような規模が大きくいろいろな面で充実している施設は、岡谷市との単純な比較は難しいが、岡谷市で取り組む場合は十分な施設がない中でどこまでできるのか、現在ある施設を障がい者の方の専用利用時間を設定したり、色々な文化、スポーツに触れ合う事のできる環境整備や、設備面の改修等をおこなえば、既存の施設でも障がい者が活動できる施設を増やすことが出来ると考える。そのためには岡谷市の予算に応じた合理的なプラン

ニングが求められる。

障がい者が進んで楽しめる余暇の必要性や活用などを積極的に発信すべきであり、地域社会の一体化を促進するための一つのモデルケースとして参考にする価値があると考ええる。

(4) 山梨県北杜市 社会福祉法人 緑樹会 「グリーンヒルホーム」

1、施設・事業概要

社会福祉法人緑樹会は、「障がい者支援施設グリーンホーム」「障がい者福祉事業所グリーンヒルプロダクツ」「障がい者グループホームたんぽぽ」の三つの部署で構成されている。基本理念は、一人一人のために～この地で一粒の麦とならん～施設利用者、家族、地域住民、職員が共に生活していく中で、お互いが信頼し、助け合い支いあい一人一人が満足し笑顔になれる法人を目指す。と謳っている。

グリーンヒルホームでは、障がいのある方が施設で生活していくうえで必要な目的にあったサービスを展開。主に夜間においての入浴や排せつの及び食事等の介護、生活等に関する相談、その他必要な日常の支援行う。

グリーンヒルプロダクツ(就労継続支援B型)では、巻きづくり、封筒作業、市役所などから請け負った援農作業などの生産活動をしている。「つどい工房杜の風」(就労継続支援A型で立ち上げたが現在はB型)はケーキやクッキー、無添加プリンなどの製造販売を手掛けている。製造したものは、市内のスーパーや道の駅、農産物直売所などの10店舗の店頭にて販売もしている。特に、シフォンケーキなどは人気の商品であり、収益はグループの大きな収入源である。

また、作業の知識、能力が高まった方については、企業などで実習を通して、本人の適正にあった職場を探してくれるようですが、現在はそこまで到達する人材がいなことと、就労先の企業を探すことも難しいとのことであった。

2、評価、感想

グリーンヒルホームの運営は、地域との連携を重視し、障がい者の自立支援を行っているが、地方では企業や仕事の機会が限られており、就労機会を確保することが難しいと感じた。また、福祉分野の人手不足や給与の低さも課題で、若い職員の確保が困難とのことである。

近年は定年延長の企業が多くなり、定年後のスタッフの人材も減っており、このような課題から、行政からの支援の重要性について強調されたことは印象的だった。

理念にある「一人一人が満足し笑顔になれる法人を目指す」の言葉こそが障がい者たちにとって、1番求められる重要な考えであると感じた。

収入面で大きな柱があることは素晴らしい事だと感じた。

3、岡谷市に反映すべき点

障がい者が独立して生活できる環境は、家族にとって期待するところだが、しかしながら、岡谷市の就労継続支援はすべて B 型事業所であり、工賃として利用者に支払われているため高額な金額ではない。そこで障がい者が働く事業所を、行政も地元企業と連携して働く場の確保が必要である。

障がいを持った方が自分の能力を伸ばすためには、色々な分野の仕事やスタッフが必要と考える。そして障がい者一人ひとりの特性を的確に見つけ、その人に合った自立の計画を官民一体となり取り組むことである。

地元企業や農業団体と連携し障がい者の働く場を提供する機会を増やすためのプラン作成や意見交換会の実施が重要であると感じた。